

ミステリ読書案内

2019.12.13 発行元

第13号 伊藤 剛

榎野道流「時をかける眼鏡」シリーズ

ここ2年ぐらいの間で集中して読んだ作家の一人。榎野道流（「ふしのみちる」と読む）。6月末に「時をかける眼鏡」シリーズの8巻目が出たので、ちょうどここで取り上げておくのもいいのかなと考えた。

榎野道流という作家

2年ほど前に集英社のオレンジ文庫で「時をかける眼鏡」シリーズが始った時から読み始めた。榎野道流の作品の中では、角川文庫から出ている『最後の晩ごはん』シリーズが代表作なのだろうが、残念ながらミステリの範疇に含めるにはちょっと無理があるようだ。

ここに取り上げた『時をかける眼鏡』シリーズも、『このミス』の今年1年発行の巻末作品リストには載っていない。世の中では、「ミステリ」として認識されていない本。たぶんライト系とか、ジュヴナイルと見られて、省かれてしまっているのだろう。

私は、最初の頃は、てっきり男性作家だと思っていた。何冊か読むうちに、どうやら女性作家らしいと気付くようになった。いろいろなシリーズを手掛けているようだが、基本はジュヴナイル系。角川ビーンズ文庫に収められている『貴族探偵エドワード』シリーズ全15巻などがある。発行部数が限られているようで、私もあと3冊未読がある。なかなか手に入らない。

『このミス』で、ミステリとして

掲載されているのは『ローウェル骨董店』シリーズと、後述の『鬼籍通覧』シリーズぐらい。

「時をかける眼鏡」シリーズ

『時をかける眼鏡』シリーズ。タイムスリップものである。法医学を学んでいる学生の西條遊馬が、中世ヨーロッパらしき時代の小国マキス島にタイムスリップし、数々の苦難を乗り越える物語である。

王家の人たちの信頼を得て、現代の知識を活かしながら、問題を解決していくことがポイント。特に医学的要素が役に立つことになっている。作者の榎野氏は法医学部出身の監察医などの仕事をしている人で、その専門性が生かされている。

確かに、巻によってはミステリ味が薄いこともある。ただ、非常に読みやすい。本も薄いので、気軽に手にとって読むことができる。

「鬼籍通覧」シリーズのことなど

『時眼鏡』より少し前に始ったのが講談社ノベルスの『鬼籍通覧』シリーズ。これが、作者の実際の仕事に近いミステリなのかもしれない。監察医と刑事の関わりを中心に話が展開していく。事件捜査において、

《榎野道流・時をかける眼鏡シリーズ》

1. 医学生と、王の死の謎
 2. 新王と謎の暗殺者
 3. 眼鏡の帰還と姫王子の結婚
 4. 王の覚悟と女神の狗
 5. 華燭の典と妖精の涙
 6. 王の決意と家臣の初恋
 7. 兄弟と運命の杯
 8. 魔術師の金言と眼鏡の決意
- 集英社・オレンジ文庫。いずれも最初に「時をかける眼鏡」という題がついている。上に掲げたのは各巻の「副題」。

《榎野道流・鬼籍通覧シリーズ》

1. 暁天の星
 2. 無明の闇
 3. 壺中の天
 4. 隻手の声
 5. 禅定の弓
 6. 亡羊の嘆
 7. 池魚の殃
 8. 南柯の夢
- 講談社ノベルス。題はどれも中国のことわざから。私がパッと意味を言えるのは「亡羊の嘆」ぐらいのものかな？

遺体を調べることの重要性は、海堂作品や知念作品など、現役医師が描いた作品にも度々出てくることである。遺体は多くのことを物語るのだ。

この『鬼籍通覧』シリーズ、発行部数が少ないのか、最近の作品の割には手に入りにくい。ノベルスの初版の印刷部数も現在はかなり少ないようだ。

この『鬼籍通覧』シリーズをもうひとつ印象付けているのが「もぐもぐタイム」と称する食事場面の描写。作者の「食べること」へのこだわりがよく伝わってくる。

海外ミステリ この1冊・連載7

C・アラー「わらの女」

カトリーヌ・アラーは、フランスの女流作家。

ここで取り上げた『わらの女』は1956年出版のアラーの第2長編。今で言えば、“悪女もの”で、悪女の完全犯罪を描いた、当時としてはセンセーショナルな一作。私の持っている創元推理文庫の表紙画像に登場しているのは、ユナイト映画の中でのショーン・コネリー。悪女のヒルデガルド・マエナー役はジーナ・ロロブリジダが勤めていた。どんどん深みにはまっていく流れにハラハラ、ドキドキ。学生の時に読んだが、「コワ〜イ思ひ」をした一作。今は、こんな流れも慣れてはしまったけれども…。

アラーには、この他にも『目には目を』『泣くなメルフィー』『死の匂い』などの作品があり、創元推理文庫に収められていた。今は手に入るのだろうか？ 書店の創元推理文庫のコーナーに行く機会が少なくなりました。